

W. B. Yeats の “Byzantium” を教室で読む

藤田 佳也*

Reading W. B. Yeats's “Byzantium” in the Classroom

FUJITA YOSHIYA*

(Accepted 7 December 2022)

1. はじめに

あらためて言うまでもないことだが、英語で書かれた文学を日本の大学の教室で学ぶことには、さまざまな意義がある。一方には、文学テキストを通して英語という言語を具体的に体験し、その用法を身につけるといふ、主に言語に関わるもの。もう一方には、英語と日本語の違い、その背景にある文化の特徴やその違いについて理解を深めるといふ、主に文化に関わるものが挙げられるだろう。

そしてこれらに加えて、他者理解とそれともなう自己理解の作業を通して、コミュニケーション能力を養う、という重要な意義もあげることができる。このコミュニケーションという要素は、言語と文化と強く結びつき、またそれらを結びつけるものでもある。

コミュニケーション能力の養成という観点から文学をとらえた場合、教室での目標の一つは、コミュニケーションの一つのあり方としての文学というものがどのように働いているのか、言葉をかえると、テキストを構成するさまざまな要素がどのように関連しあって読者に向けてメッセージを作り出しているのか、ということをも文学テキストを通して具体的に体験し、理解を深めることだといえる。

そしてそれに続く目標は、文学の講義を通して得られる知識や洞察を通して、学生たちが教室の外における日常の言語使用やコミュニケーションに対する意識を活性化し、他者理解、そして自己理解のヒントをつかむ、ということになるだろうか。文学の講義の際には、必ず最後にリアクション・ペーパーを学生たちに提出してもらうことにしているが、そ

のコメントを読むと、SNS等のコミュニケーション・ツールが常に当たり前に自分の手のなかにある今の学生たちが、時にはそのツールに振り回され、コミュニケーションがうまくいかないことで、傷つき、悩んでいる様子が垣間見える。大学を卒業し、社会人という立場になったとき、コミュニケーションをめぐる問題はさらに重く感じられるものとなるはずである。

学生たちが主体的に講義に取り組むような状況を作るためには、今、教室で学んでいることが、学生たちの「いま、ここ」における関心事や、また学生たちの過去や未来と結びついていることを示す必要がある。他者理解、自己理解、コミュニケーションというキーワードは、この点において有効ではないだろうか。

このようなことを考えるうえで筆者が刺激を受けているのは、コミュニケーションという観点から、文学についての洞察を現実の言語活動を活性化することに結びつけようとしている H. G. Widowsion の研究、また、医者と患者の対話を重視し、文学の読解を通して、物語能力の養成をめざす「ナラティブ・メディスン」という医学界の試みである。

教室においてこういった学びを実現するうえで前提となるのは、考えるという行為を学生たちが実践することであり、その一つの重要なきっかけとなるのが「気づき」という経験であることは間違いない。しかし、文学表現の特徴に学生たちが自ら気づくということは、それほど容易なことではない。ほとんどの学生たちは、適切な指針があつて初めて文学に反応できるようになる。

そこで必要となるのは、テキストの読解の過程で

* 農食環境学群 循環農学類 英語圏文化研究室
English-Speaking Culture
Department of Sustainable Agriculture
College of Agriculture, Food and Environment Sciences

「気づき」を導くような適切な設問，課題を教室の学生たちに提示することだと考えられる。そしてそれが万が一うまくいけば，印象を漠然と語るのではなく，テキストの意味をその具体的な言語表現を明確な根拠にして，学生たち自身が主体的に関与しながら論じる基点ともなっていくかもしれない。本稿においては，W. B. Yeats の“Byzantium”を教室で用いる場合の一つの方法について考察してみたい。

2. 学生に提示する3つの設問

“Byzantium”は，対立する二つの世界が拮抗する様子を描いている。感覚と知性，自然と超自然，この世とあの世，肉体と精神，昼と夜，呼び方はさまざまだが，二つの世界の葛藤が描かれているという点で，これまでの研究は一致している。

5つの連は，時系列順に並んでおり，第1連では昼の世界が終わり夜の世界へと移っていく様子が描かれ，第2連から第4連までは夜の世界が深まっていく様子が，そして最終連においては夜の世界が終わり，再び朝がやってくる様子が描かれている。以下に原文と高松雄一訳を示す。

Byzantium

The unpurged images of day recede;
The Emperor's drunken soldiery are abed;
Night resonance recedes, night-walkers' song
After great cathedral gong;
A starlit or a moonlit dome disdains
All that man is,
All mere complexities,
The fury and the mire of human veins.

清められぬもろもろの昼の姿がしりぞく。
酔いつぶれた皇帝の兵士どもは寝た。
大伽藍の銅鑼が鳴って，夜の響きが引きしりぞく。
次いで，夜歩く娼婦らの歌が。
星明りの，または月明りの円屋根は蔑視する，
人間存在のすべてを
ただの錯雑にすぎぬものすべてを，
人間の血の狂暴と汚辱とを。

Before me floats an image, man or shade,
Shade more than man, more image than a shade;
For Hades' bobbin bound in mummy-cloth
May unwind the winding path;

A mouth that has no moisture and no breath
Breathless mouths may summon;
I hail the superhuman;
I call it death-in-life and life-in-death.

私の前に一つの幻像が，人が，あるいは影が，漂う。
人というよりむしろ影，影というよりむしろ幻像。
ミイラの布をぐるぐると巻きつけたこの冥府の糸巻は，
曲がりくねる小道を解きほぐすのかもしれない。
湿りもなく，息もない一つの口が
多くの息の絶えた口を召喚するのかもしれない。
私はこの超人的なものに挨拶を送る。
私はこれを生の中の死，死の中の生と言う。

Miracle, bird or golden handiwork,
More miracle than bird or handiwork,
Planted on the starlit golden bough,
Can like the cocks of Hades crow,
Or, by the moon embittered, scorn aloud
In glory of changeless metal
Common bird or petal
And all complexities of mire or blood.

奇蹟が，鳥が，あるいは金の手細工が，
鳥，手細工というよりはむしろ奇蹟が，
星明りの下で金の枝に据えられると
冥府の雄鶏どものように鳴く。
あるいは月に苛立って，
不変の金属の栄光を誇り，
並の鳥や花びらを
また汚辱や血の錯雑のすべてを，声高らかに軽蔑する。

At midnight on the Emperor's pavement flit
Flames that no faggot feeds, nor steel has lit,
Nor storm disturbs, flames begotten of flame,
Where blood-begotten spirits come
And all complexities of fury leave,
Dying into a dance,
An agony of trance,
An agony of flame that cannot singe a sleeve.

真夜中に，皇帝の敷石の上を炎がかすめて行く。
薪で燃えるのでもなく，銅から発するのでもない，

嵐にも揺るがぬ炎、炎から生れた炎が。
そこに、血から生れた霊たちが来て、
狂乱の錯雑をことごとく捨て去り、
死んで舞踏と化し、
恍惚の苦悶となり、
袖ひとつ焦がさぬ炎の苦悶となる。

Astraddle on the dolphin's mire and blood,
Spirit after spirit! The smithies break the flood,
The golden smithies of the Emperor!
Marbles of the dancing floor
Break bitter furies of complexity,
Those images that yet
Fresh images beget,
That dolphin-torn, that gong-tormented sea.

海豚の汚辱と血に打ちまたがって、
霊がつきからつきに！ 細工場が潮を砕く、
皇帝の金の細工場が！
舞踏場の床の大理石が打ち砕く、
錯雑した苦い狂暴を、
なおも新しい幻像を生みつける
あの幻像どもを、
海豚に引き裂かれ、銅鑼に苛まれるあの海を。

講義では、この詩について学生たちに以下の3つの設問を提示し、レポートを課す。

- (1) How are the two worlds described?
2つの世界はどのように描かれているか？
- (2) What repetitions are there?
どのような反復がみられるか？
- (3) How do the repetitions work?
これらの反復はどのような役割を果たしているか？

あるいは、アクティブ・ラーニングの一環として、グループでの作業とさせても良いだろう。

これらの設問の一つのねらいは、文学テキストを読むうえで、対比、反復、正確には、差異をともなった反復という観点が非常に有効であることを理解することである。おそらくこの詩を一読した段階では、全く手も足も出ないとほとんどの学生たちが感じるだろう。いわば理解不能な絶対的他者といえるものかもしれない。しかし、そのような場合でも、有効な観点から考察することで、少なくともその意義の一端に自分の力でたどりつけるということを教

室で実際に学生たちが自ら体験すること、そしてこの体験を通し他者理解の可能性を実感し、そのヒントをつかむこと、それがこの課題の目標である。

そして更に、他者理解が自己理解につながり、コミュニケーションというものに関して学生たちがなんらかのヒントを得るとというのが、その先にある目標となる。ここからは、講義で提出されたレポートをもとに考察を行っていく。

3. How are the two worlds described?

まず最初に、訳を参照しながら2つの世界を描く表現を区別する作業に取り組んでもらう。“How are the two worlds described?” 「2つの世界はどのように描かれているか？」これが最初の問いである。具体的には、マーカーペンなどを使って、対比的に描かれ、またその対立が強調されている2つの世界それぞれを描写している箇所を色分けさせてみる。一見、単純な作業だが、苦勞する学生も見受けられる。そこでヒントとして、動詞に着目する、という方法を提示してみる。

例えば“disdains” (I-5) は、主語と目的語の間にある対立関係、主語の位置にあるものが目的語の位置にあるものに対してもつ優越的なスタンスを示唆するものである。これと同様の例は“scorn” (III-5), “Break” (V-5) にもみられる。興味深いことに、5つの連からなるこの詩において、それぞれ第1連、第3連、第5連の同じ5行目にこれらの動詞は用いられている。

少し観点を変えることでみえてくるものがあることを理解させると同時に、詩が内包しているパターンを見つける愉しみについて学生たちに実感させたい。学生たちの理解できる概念（ここでは、動詞、主語、目的語といった文法用語）を用いながら、できるだけ具体的な指示と説明を示すことが有効であろう。

4. What repetitions are there?

次の設問は、“What repetitions are there?” 「この詩にはどのような反復がみられるか？」である。反復は大きく、(1) word, phrase の反復と (2) sentence pattern の反復に分けられる。

word, phrase の反復の一つは、“fury”, “complexity”, “mire”, “blood” という語に関わるものである。第1連には“The fury and the mire of human veins” (I-8) という表現があるが、第3連では“all complexities of mire or blood” (III-8), 第4連では“all complexities of fury” (IV-5), 第5連

では“the dolphin's mire and blood” (V-1), “bitter furies of complexity” (V-5) と、類似の表現が微妙な差異をとめないながら繰り返し姿を現している。

word, phrase の反復として次に, “starlit”, “moonlit” という表現があげられる。第1連には, 先にあげた “disdains” の主語として “A starlit or a moonlit dome” (I-5) という表現があるが, 第3連には, “the starlit golden bough” (III-3) と月明かりについての言及がなくなっている。

word, phrase の反復として最後にあげるのが, “image”, “images” という表現である。第1連冒頭では, “The unpurged images of day” (I-1) と感覚・肉体の世界に属するものを描く表現に用いられているが, 第2連では “Before me floats an image, man or shade, / Shade more than man, more image than a shade” (II-1~2) と知性・精神の世界の存在を描写するのに用いられている。

次に sentence pattern の反復であるが, これについては大きく2つ指摘できるだろう。一つは, 今 word, phrase の反復としてとりあげた, 第2連の “Before me floats an image, man or shade, / Shade more than man, more image than a shade” (II-1~2) における or や more than を繰り返すパターンである。このパターンは, 続く第3連の “Miracle, bird or golden handiwork, / More miracle than bird or handiwork” (III-1~2) において, わずかな差異をとめないながら反復されている。

もう一つ sentence pattern の反復としては, 羅列される目的語が次第に長さを増しているパターンがあげられる。このパターンは, 第1連の “A starlit or a moonlit dome disdains / All that man is, / All mere complexities, / The fury and the mire of human veins. (I-5~8), そして最終連 “Marbles of the dancing floor / Break bitter furies of complexity, / Those images that yet / Fresh images beget, / That dolphin-torn, that gong-tormented sea. (V-4~8) においてみられる。

5. How do the repetitions work? (word, phrase の反復)

「これらの反復はどのような役割を果たしているか?」これが次の問いとなる。まずは word, phrase の反復として “fury”, “complexity”, “mire”, “blood” という語に関わる反復から, 学生たちのコメントを紹介しながら考えていくことにする。以下, 学生たちのコメントは, 手を加えず, カギ括弧で示す。

これらの反復については学生たちの指摘も多くな

されるが, 反復における細かな差異に注目するのではなく, それらを全体としてとらえるコメントが大勢を占める。たとえば「これらの語がすべて人間という存在の汚れ, 我々が住む世界を表している。神の世界が軽蔑する対象」などはその代表である。第4連の “complexities of fury” (IV-5) から最終連の “furies of complexity” (V-5) への変化に注目し, 「第5連において, fury と complexity の単複表現がそれまでと逆になっている。complexities を不可算名詞にすると, 複雑なものというより, 複雑さという意味が強くなる」と, 辞書を調べたうえでその差異について指摘する学生もいる。

“fury”, “complexity”, “mire”, “blood” という語が, 感覚・肉体の世界と結びついていることは理解できても, 反復における細かな差異には学生たちはなかなか気づけない。そこで焦点を2点に絞って考察してみる。

まずは, 第3連の “mire or blood” (III-8) と第5連の “mire and blood” (V-1) では, 何が違うのか, 学生たちと考える。まずこの “or” だが, 直前の行でも使用されている。そこには “scorn aloud” 「声高らかに軽蔑する」とあり, 蔑む口調が聞き取れることを確認する。そして第5連においては, “or” が “and” に変わること, 軽蔑の対象であった感覚・肉体の世界が力を増していることが表されている。第3連における軽蔑の口調があるがゆえに際立っているといえる。

続いて, 第4連の “complexities of fury” (IV-5) と第5連の “furies of complexity” (V-1) の違いに注目してみる。“of” 以下の形容詞句が修飾する名詞が “complexities” から “furies” へと変わっており, 感情の強さが前面に出て来ているが, これもまた, 感覚・肉体の世界の脅威を際立たせる表現であるといえる。この2つの差異をとまなう反復がいずれも, 感覚・肉体の世界が力を増していつている様子を描写していること, そして, 夜の世界が終わり朝がやってくる時間帯を描く最終連に姿を現していることを, 学生たちと確認する。

word, phrase の反復として, 次に “starlit”, “moonlit” という表現について考えてみる。第1連には “A starlit or a moonlit dome” (I-5), 第3連には “the starlit golden bough” (III-3) という表現があるが, 第1連にあった月明かりについての言及が第3連ではなくなっている。この点に気づき, 「星明かりと月明かりの表現で, どのような違いがあるのか」とレポートに書いてくる学生もいるが, なかなか答えまでは行き着けない。

ここではまず、「月」が、移ろうものの象徴としてよく用いられることを再確認する。そしてこの詩においてその「月」は、感覚・肉体の世界と結びつくものであるといえる。つまり，“starlit or moonlit”から“starlit”への変化が暗示しているのは、知性・精神の世界が力を増し、感覚・肉体の世界の力が抑え込まれつつある状況だといえる。一方で，“starlit”という表現の2行後には“by the moon embittered”（Ⅲ-5）という表現があり、感覚・肉体の世界の脅威が継続していることを示唆している。反復と差異を用いた表現によって、2つの世界の葛藤が非常に巧妙に具体化されている。

word, phrase の反復として最後に，“image”，“images”という表現が、2つの世界両方の描写に姿を現す点について考えてみる。具体的には、第1連では“The unpurged images of day recede”（I-1）と感覚・肉体の世界に属する存在を表す一方、第2連では“Before me floats an image, man or shade, / Shade more than man, more image than a shade”（II-1～2）と知性・精神の世界の存在を描写するのに用いられている。この点に気づいた学生からは、「images（第1連）は昼の姿、image（第2連）は幻影。image のもつ2面性（2つの世界）を表しているのではないか」といったコメントも出てくる。

image という語の意味の広さを利用しつつ、感覚・肉体の世界において具体的な形をとっているものと、知性・精神の世界における抽象的な存在を同じ語を用いて表現することで、2つの世界の途絶えることのない結びつきが示唆されている。そして、2つの世界の結びつきが示唆されることで、その葛藤が際立ってくるということを学生たちに理解させたい。

6. How do the repetitions work? (sentence pattern の反復)

次にセンテンス・パターンの反復に注目してみる。まず最初は、第2連の“Before me floats an image, man or shade, / Shade more than man, more image than a shade”（II-1～2）における or や more than を繰り返すパターンについて。このパターンは、続く第3連の“Miracle, bird or golden handiwork, / More miracle than bird or handiwork”（Ⅲ-1～2）において若干の差異を伴いながら反復されている。この反復については、気づく学生たちも多く、以下のような的確なコメントも寄せられる。

「だんだんと抽象的になっていっている」
 「人<影<像というように、実体をもたないものに近づけることで、この世のものではないことを示している」
 「3つの存在の強調」
 「3つのものは異なる存在のものだが、一方で似ていることを表している」

これらの表現は、知性・精神の世界の存在が、image でありながら、man, shade の属性も持っていること、miracle でありながら、bird, handiwork の属性も持っており、抽象的な存在でありながら、実体・具体性も兼ね備えていることを非常に巧妙に表す表現であるといえる。ここでもまた2つの世界の結びつきが示唆されることで、その葛藤が強調されている。

sentence pattern の反復としてもう一つ、目的語が次第に長さを増しているパターンをみでみる。

A starlit or a moonlit dome disdains
 All that man is,
 All mere complexities,
 The fury and the mire of human veins.
 (I-5～8)

Marbles of the dancing floor
 Break bitter furies of complexity,
 Those images that yet
 Fresh images beget,
 That dolphin-torn, that gong-tormented sea.
 (V-4～8)

このセンテンス・パターンの反復については、なかなか学生たちは気づけない。ここではまず、詩においては、単語、フレーズあるいはセンテンスの長短が大きな役割を果たすことがあることを、2つの具体例を通して学生たちと考える。最初は Shakespeare の *Macbeth* において、マクベス夫妻がダンカン王を殺害した直後のマクベスのセリフから。

Will all great Neptune's ocean wash this blood
 Clean from my hand? No; this my hand will
 rather
 The multitudinous seas incarnadine,
 Making the green one red. (*Macbeth*, II. ii. 54-60)

マクベスは、自分の手についたダンカン王の血を見て恐怖に駆られているわけであるが、“The multitudinous seas incarnadine”という表現は、単音節の単語が多用されるなか、顕著に長い単語を繰り返し用いることで、広大な海が血で真っ赤に染まっている光景を聴覚効果によって再現しようとしている。セリフを聴くのではなく、テキストを読んでいる場合にも、その視覚的効果は顕著である。

次に Seamus Heaney の “Digging” を例としてあげる。

Digging

Between my finger and my thumb
The squat pen rests; snug as a gun.

Under my window, a clean rasping sound
When the spade sinks into gravelly ground:
My father, digging. I look down

Till his straining rump among the flowerbeds
Bends low, comes up twenty years away
Stooping in rhythm through potato drills
Where he was digging.

The coarse boot nestled on the lug, the shaft
Against the inside knee was levered firmly.
He rooted out tall tops, buried the bright edge deep
To scatter new potatoes that we picked,
Loving their cool hardness in our hands.

By God, the old man could handle a spade.
Just like his old man.

My grandfather cut more turf in a day
Than any other man on Toner's bog.
Once I carried him milk in a bottle
Corked sloppily with paper.
He straightened up
To drink it, then fell to right away
Nicking and slicing neatly, heaving sods
Over his shoulder, going down and down
For the good turf. Digging.

The cold smell of potato mould, the squelch and
slap

Of soggy peat, the curt cuts of an edge
Through living roots awaken in my head.
But I've no spade to follow men like them.

Between my finger and my thumb
The squat pen rests.
I'll dig with it.

第5連までは、ジャガイモを掘る父親の思い出を過去形で語っているが、第6連において、動詞が “Nicking”, “slicing”, “heaving”, “going”, “Digging” と ing 化し、行為自体に焦点が合わされるようになる。

そして第7連、第8連においては、次第にセンテンスが短くなり、最後の “I'll dig with it” 「私はペンで掘る」という簡潔な決意の言葉で、書くことと耕すことが一体化し、締めくくられる。次第に短くなっていくセンテンスそのものが、言葉ではなく行為の重要性を具体化しているといえる。

これらの具体例を参考にしながら、イエイツの詩を読んでみる。3つの目的語が羅列され、その長さが次第に長くなっていくことで、目的語が動詞の支配を逃れ、独自の力を得ていく。感覚・肉体の世界の力が次第に増大していく状況が、詩の形そのものによって具体化されているといえるだろう。この2つの表現が、第1連と最終連に姿を現わすのは偶然ではない。第1連で描かれるのは、昼から夜へと移り変わる、いまだ感覚・肉体の世界の影響が残り続けている時間帯であり、最終連で描かれるのは、夜が終わり朝が戻って来ようという、感覚・肉体の世界が再び優勢となろうという時間帯である。文学テキストの背後に潜んでいるパターンとその意義について学生たちに体験させる良い例であろう。

7. “Sailing to Byzantium” と “Byzantium” の比較

“Byzantium” を読んだ後に、もう一つ課題を用意しておく。それは “Byzantium” と “Sailing to Byzantium” の比較である。以下に原文と高松雄一訳を示す。

Sailing to Byzantium

I

That is no country for old men. The young
In one another's arms, birds in the trees,
—Those dying generations— at their song,
The salmon-falls, the mackerel-crowded seas,
Fish, flesh, or fowl, commend all summer long

Whatever is begotten, born, and dies.
Caught in that sensual music all neglect
Monuments of unageing intellect.

あれは老人の住む国ではない。若い者らは
たがいに抱き合い、鳥は木々に止って
— この死んで殖えるやから — ひたすら歌う。
鮭がのぼる瀧、鯖のむらがる海、
魚も、獣も、あるいは鳥も、夏のあいだじゅう
種を受け、生れ、死ぬ者らすべてを称える。
その官能の音楽にとらわれて、すべてが
不老の知性の記念碑をなおざりにする。

II

An aged man is but a paltry thing,
A tattered coat upon a stick, unless
Soul clap its hands and sing, and louder sing
For every tatter in its mortal dress,
Nor is there singing school but studying
Monuments of its own magnificence;
And therefore I have sailed the seas and come
To the holy city of Byzantium.

老いぼれというのはけちなものだ。
棒切れにひっかけたぼろ上衣そっくりだ、
もしも魂が手を叩いて歌うのでなければ。
肉の衣が裂けるたびになお声高く歌うのでなけ
れば。
それに、魂の壮麗を記念する碑を学ぶほかに
魂の学校などあるはずもない。
だから私は海を渡って、
聖なる都ビザンティウムにやって来た。

III

O sages standing in God's holy fire
As in the gold mosaic of a wall,
Come from the holy fire, perne in a gyre,
And be the singing-masters of my soul.
Consume my heart away; sick with desire
And fastened to a dying animal
It knows not what it is; and gather me
Into the artifice of eternity.

おお、壁面の金モザイクの中にあるように、
神の聖なる火の中に立ちつくす賢者たちよ、
聖なる火の外に出てくれ、渦をなして旋回して
くれ、

そうして、私の魂の歌の教師になってくれ。
この心を灼きつくしてくれ。欲望に悶え
死にかけた動物に繋がれているゆえに
こいつはおのれの何たるかを知らぬのだ。私を
抱き締めて、永遠の工芸品に変えてくれ。

IV

Once out of nature I shall never take
My bodily form from any natural thing,
But such a form as Grecian goldsmiths make
Of hammered gold and gold enamelling
To keep a drowsy Emperor awake;
Or set upon a golden bough to sing
To lords and ladies of Byzantium
Of what is past, or passing, or to come.

ひとたび自然の外に出たら、私は
どんな自然の事物からも肉体の形を借りるま
い。
私が選ぶのは、ギリシアの金細工師たちが、
うつうつと眠る皇帝を目覚めさせておくため
に、
打ち延べた金と琺瑯引きの黄金で造りあげた形
だ。
あるいは、ビザンティウムの貴族や貴婦人たち
に、
過ぎ去り、過ぎゆき、来ることを歌い聞かせる
ため、
金の枝の上に据えられたものの形だ。

W. B. Yeats の “Byzantium” は 1930 年 9 月に書
かれ、1933 年出版の詩集 *The Winding Stair and
Other Poems* に収録されたが、この詩は 1928 年出
版の詩集 *The Tower* に収録された “Sailing to
Byzantium” に対する Sturge Moore の批判が一つ
のきっかけとなって書かれた。ムーアの批判は主に
第 4 連に向けられている。

Your *Sailing to Byzantium*, magnificent as the
first three stanzas are, lets me down in the
fourth, as such a goldsmith's bird is as much
nature as a man's body, especially if it only sings
like Homer and Shakespeare of what is past or
passing or to come to Lords and Ladies. (Bridge
162)

知性・精神の世界の象徴である金細工師の作る鳥が、

あまりにも自然界に属しているもののように感じられる点にがっかりしたというのがその要点であるが、この批判に対してイエイツは次のように答えている。

The poem ["Byzantium"] originates from a criticism of yours. You objected to the last verse of Sailing to Byzantium because a bird made by a goldsmith was just as natural as anything else. That showed me that the idea needed exposition." (Bridge 164)

ムーアの批判に対して、詳しい説明が必要であるとイエイツが考えたことは何だったのか、これを考えるのが次の課題となる。“Byzantium”を対比、反復という観点から読んできたが、今度は“Sailing to Byzantium”との比較を、同様に対比、反復という観点から学生たちに行わせてみる。

たとえば、“Sailing to Byzantium”冒頭の“*That is no country for old men. The young / In one another's arms, birds in the trees / —Those dying generations—at their song.*”における“*those*”, “*that*”は、“Byzantium”の最後“*Those images that yet / Fresh images beget, / That dolphin-torn, that gong-tormented sea.*”において繰り返されている。これはかなり意図的であることは間違いない。このように、2つの詩で使われている *that, those* であるが、そのニュアンスに違いは見られないか、あるとしたらその違いはなにか、このあたりから話を始めても良いかもしれない。

今回は紙幅の関係で詳しく紹介できないが、学生たちからもさまざまな意見が出される。そのなかには以下のように興味深いものも多くある。

「2つの詩には、*bird, fowl, cocks* と様々な形で鳥を表す描写が登場する。」

「主語の違い。“Sailing to Byzantium”では主語が主に命あるもの。第1連では *fish, flesh, fowl* などといった生き物が主語となっている。第2連以降では“*I*”が主語となって展開。一方、“Byzantium”は主語が主に命あるものではない。例えば、*image, miracle* など。第4連の“*spirit*”は、命あるものでないのに、死後の世界を連想させる。」

「“Sailing to Byzantium”の第3連では、“*fire*”

が、“Byzantium”の第4連では“*flame*”が一貫して使用されている。」

「“Sailing to Byzantium”は主観的な書き方、欲望の感情を読み取ることができる。

一方“Byzantium”では、事実が連ねられ、断定的な言い方がされており、主観が含まれていない。」

「“Sailing to Byzantium”は老いた自分がByzantiumへ渡り、理想を求める様子が描かれているのに対して、“Byzantium”は、昼の世界と夜の世界が拮抗する様子が描かれている。」

「“Sailing to Byzantium”は老いた自分が聖なる都であるByzantiumに行き、新しい姿に生まれかわって永遠を手にするという願望が描かれていて、“Byzantium”は昼の世界と夜の世界のせめぎ合いが繰り返されるような様子が描かれている。」

最初の課題演習が効果をあげているかどうかはさておき、学生たちのコメントには興味深いものが含まれている。

8. 最後 に

他者理解とそれにとまなう自己理解の作業を通してコミュニケーション能力を身につけるという目標を掲げる場合、英語で書かれた文学「で」学ぶ、ということに重点があるように感じられるかもしれないが、しかし、それは英語で書かれた文学「を」学ぶということそのものでもある。

文学を学ぶ意義について何かと言われる昨今であるが、他者理解、自己理解、コミュニケーションというキーワードは、これに対するひとつの回答となるものではないだろうか。

これらのキーワードは、「文学で」と「文学を」を上手く結びつけ、なによりも、学生たちに自分たちが学んでいることが価値のあるものであること再確認させる、ひとつの助けになるのではないかと考えている。

参考文献

ウイドウソン, H.G. 『文体論から文学へ：英語教育の方法』田中英史, 田口孝夫訳, 彩流社, 1989年。

- ウイドウソン, H. G. 『文学と教育：詩を体験する』
梅沢時子, 野呂浩, 小田朗美訳, 英宝社, 2005
年。
- シャロン, リタ他 『ナラティブ・メディスンの原理
と実践』 斎藤清二他訳, 北大路書房, 2019 年。
- 櫻井正一郎, 藪下卓郎, 津田義夫共編著 『イエイツ
名詩評釈』 大阪教育図書, 1983 年。
- 鈴木弘 『図説イエイツ詩辞典』 本の友社, 1994 年。
- 高松雄一編 『対訳イエイツ詩集』 岩波, 2009 年。
- Bridge, Ursula, ed. *W. B. Yeats and T. Sturge
Moore: Their Correspondence, 1901-1937*.
London: Routledge & Kegan Paul, 1953.
- Charon, Rita. *Narrative Medicine*. Oxford: Oxford
UP, 2006.
- Ellman, Richard. *Yeats: the Man and the Masks*.
London: Penguin, 1979.
- Foster, R. F. *W. B. Yeats: A Life*. Oxford: Oxford UP,
2003.
- Heaney, Seamus. *Selected Poems, 1966-1987*.
London; Boston: Farrar, Straus and Giroux,
1990.
- Jeffares, A. Norman. *A New Commentary on the
Poems of W. B. Yeats*. London: Macmilan, 1984.
- Shakespeare, William. *Macbeth*. London: Bloomsbury
Arden, 1997.
- Widdowson, H. G. *Stylistics and the Teaching of
Literature*. Oxford: Routledge, 1975.
- Widdowson, H. G. *Practical Stylistics*. Oxford: Oxford
UP, 1992.
- Yeats, W. B. *The Variorum Edition of the Poems of
W. B. Yeats*. London: Macmillan, 1966.